

普通科高校教師の学習観

田 中 節 雄*

Views about Learning of High School Teachers in General Education Course

Setsuo TANAKA

1. 問題の設定

(1) 問題の設定

高校生が学校生活の中で学ぶべきことがらにはどんなものがあるのだろうか。まず挙げられるものとしては高校生活の中心的な活動である授業によって学ぶことになっている「教科」の内容（より実情に即して言えば「教科書に書かれた知識」）がある。

しかし、高校生が一人の市民として社会に出て行く前の人生の段階で身につけておくべき事柄＝学ぶべき事柄は、教科の内容にとどまるものではない。教科の学習がきわめて重要であることは確かだとしても、高校生の学びがそれだけに限定されたとしたら、それは一社会人として必要な能力や態度においてはなほだ不十分なものしか身につけていないということになる。

教科の学習以外に高校生に必要なものとして次のような学習がある。

- ①学校の教科に限定されない広い領域にわたる知を獲得する学習（教科書以外の幅広い読書など）
- ②学校卒業後の社会生活で役立つ知識・思考力・判断力を育てるための学習（多様な人々との交流。現実の政治的世界や職業的世界に関する知識。あるいは職業選択や生き方の選択に役立つ知識技能など）
- ③学ぶことそれ自体の楽しさを味わう経験

私の判断では、高校生が「教科の内容」以外にこのような学びの経験を持つことは彼らが高校卒業後に社会人として生きていくうえで非常に重要なものである。このような学びについて、普通科高校の教師はどのように捉えているのだろうか。彼らに対するアンケート調査を基にその問題について検討することが本研究の課題である。

(2) 調査方法

本研究の課題を果たすために、A県の公立普通科高校の教員を対象に以下のようなアンケート調査を実施した。

調査実施時期：2002年2月～3月

*人間関係学科 教授

調査対象者：A県公立普通科高校教員503名
 サンプルング方法：A県学校関係職員名簿より無作為抽出
 調査料配布方法：郵送
 回答数150（回収率29.8%）

2. 調査結果の分析

（1）アンケート回答者の諸属性

アンケートに回答した教師の属性は次のようになっている。

①勤務校の入学難易度

A県の大手予備校が発表している県内高校の偏差値を基準に調査対象校を5グループに分けると、各グループの高校に所属する回答者の割合は次のようになっている（カッコ内数値は予備校発表偏差値）。

難関校 (59以上)	準難関校 (53～58)	平均校 (48～52)	準平易校 (43～47)	平易校 (43以下)
15.3	20.0	26.0	22.0	16.7

②性別・年齢構成

調査対象教員の性別の割合は、男性が77.3%、女性が22.7%である。また、年齢構成は次の通りである。

25歳未満	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50～54歳	55歳以上
0.0%	2.7%	4.0%	11.3%	24.0%	20.7%	20.7%	16.7%

③担当教科

調査対象教員の担当教科別の割合は次の通りである。

国語	社会	数学	理科	英語	体育	芸術	家庭
12.7	15.3	14.0	15.3	26.0	10.7	2.7	3.3

（2）普通科高校で生徒が経験している学習について教員はどう考えているのか

教科の学習も含めた上記のさまざまな学習活動を次のように分類し、普通科高校の教師がそれらの学習をどのように捉えているのかを調査結果をもとに検討してみる。（括弧内アルファベットは下記集計表に示された質問項目に対応している。）

- ①学校の教科に含まれたさまざまな知識を獲得する学習（E・J）
- ②学校の教科に限定されない広い領域にわたる知を獲得する学習（C・D）
- ③学校卒業後の社会生活で役立つ知識・思考力・判断力を育てるための学習（F・G・H・I・K）
- ④学ぶことそれ自体の楽しさを味わう経験（A・B）

これらの学習経験を普通科高校の教師はどのように捉えているのだろうか。

5つの領域に対応する11の学習経験について、それぞれがどの程度重要なものであるかをたずねた結果が表1である。

表1 学習経験の大切さ

	とても 大切	ある程度 大切	あまり 大切でない
A. 学ぶことの楽しさ、分かることの楽しさを知ること	84.0	12.7	3.4
B. 自分の得意な分野を発見し、その学習を深めること	80.0	17.3	2.7
C. 自分の将来の生き方をゆっくりと考える時間をもつこと	77.3	20.7	2.0
D. 学校の勉強と直接関係のない本でも幅広く読むこと	70.0	28.0	2.0
E. それぞれの教科の知識を身に付けること	68.5	29.5	2.0
F. 時事問題について自分なりの意見をもつこと	57.4	34.7	8.0
G. 世の中の職業の種類やその内容について知ること	52.7	39.3	8.0
H. 政治に関心を持つこと	40.0	48.0	12.0
I. 将来社会で働く時に直接役立つ知識や技術を学ぶこと	28.0	48.0	24.0
J. 懸命に勉強してよりレベルの高い大学を目指すこと	24.2	49.7	26.1
K. 農家・工場・商店・会社などで実際に働く体験をすること	23.3	30.7	46.0

この結果から次のようなことが言える。

①「学ぶことの楽しさ、分かることの楽しさを知ること」が「とても大切」と答えた教師は84.0%、また、「自分の得意な分野を発見し、その学習を深めること」は80.0%と、非常に高い数値になっている。「教科の知識を身に付けること」(68.5%)や「学校の勉強と直接関係のない本でも幅広く読むこと」(70.0%)あるいは「懸命に勉強してよりレベルの高い大学を目指すこと」(24.2%)など、一般的に普通科高校の教育の中心的な目標とみなされている学習よりもより一層大切なものとされている。

このことは普通科高校の教師が「学び」という人間の活動それ自体に高い価値を置いているということを示している。すなわち、獲得した知識技術の有用性や能力発揮による報酬への関心は当然あるが、それ以上に、「学び」という活動それ自体がもたらすいわば「自己充足的」な価値に彼らの目が向いている、ということである。

②「自分の将来の生き方をゆっくりと考える時間をもつこと」が「とても大切」と答えた教師が77.2%おり、「それぞれの教科の知識を身に付けること」「懸命に勉強してよりレベルの高い大学を目指すこと」が「とても大切」と答えた教師よりも多い。

このことは、普通科高校教師が言わば「生徒の生全体」に強い関心を有していることを表していると言えだろう。

学校の教師に課せられた基本的な役割は「教科の内容に関する知識」を身に付けさせることである。学校生活の大半を占める「授業」の主要な目的はその教科の内容を学ばせることである。そのことは学校教育法にも記されているし、各教科の目的や内容を規定した学習指導要領にも記載されている。それに対して「自分の得意な分野を発見させること」や「自分の将来の生き方を考えさせること」は学校教育法にも学習指導要領にもなんら明記されていない。そのような制度の中に置かれた高校で教育に携わる見でありながら、にも関わらず、教師たちは教科の内容に関する知識を身に付けさせることよりも「自分の得意な分野を発見させること」や「将来の生き方をゆっくりと考えさせること」をより大切なものと捉えているわけである。

日本の教師は昔から生徒の「全人格」に関わり、その「生き方」にも積極的に関わることを自らの使命とするという傾向にあったが、ここに示された普通科高校教師の学習観にも、その日本の教師の伝統的な傾向が息づいていることがうかがえるのではないかな。

しかし他方、「将来の生き方をゆっくり考える時間を持つこと」を非常に重視していながら、そのような作業をするためにはどうしても不可欠な条件と言える「世の中の職業の種類やその内容について知ること」については56.1%とかなり数値が低くなっている。これは「将来の生き方を考える」ことを実際に行うためには「職業の種類や内容を知る必要がある」という認識が教師には必ずしも強くないことを示している。「生き方」に関わる問題について具体的かつ実践的に学ばせることを十分に行ってこなかった点は日本の高校教育の欠陥の一つと言ってよいが、その欠陥がこうした形で表れていると思われる。

また、「将来社会で働く時に直接役立つ知識や技術を学ぶこと」がとても大切と考えている教師は28.0%ときわめて少ない。同じ内容のアンケートを職業科教師にも行っているのだが、彼らの場合は66.7%となっており、両者の差は大きい。職業科高校の教育目標が職業の世界で直接役に立つ知識や技能の形成にあるのに対して普通科高校の教育目標がそうっていないことが反映されていると思われるが、それにしても普通科高校教師のこの数値はあまりにも低いと言わざるを得ない。さらに、「農家・工場・商店・会社などで実際に働く体験をすること」がとても大切と答えた普通科教師は23.3%とやはり非常に少ない。これらの結果は「労働」「生産活動」に対する普通科高校教師の関心の低さを如実に表している。

③高校教育の中心的な課題と言える「それぞれの教科の知識を身に付けること」について見てみると、「とても大切」と答えた教師は68.5%である。大多数の教師が教科の知識を学ばせることを重要視していることが分かる。学校生活において生徒はさまざまな知識を身に付けることが期待されているが、その知識を整理したものが「教科」であり、その教科の知識を身に付けさせるためにこそ「授業」という活動があるのだから、このような反応は当然かもしれない。

それに対して意外な感を抱かされるのが「懸命に勉強してよりレベルの高い大学を目指すこと」がとても大切と答えた普通科高校教師が24.2%しかいないことである。

普通科高校において授業の内容や方法、あるいは生徒指導のあり方をもっとも強く左右しているものが、まさに「大学受験」であることは確かだと思われるが、当事者である教師たちは、大学受験競争に勝ち抜くことを日常の教育活動の駆動原理としていないということになる。

「本音が出ていない」「自己欺瞞に陥っている」などの解釈もできないわけではないが、調査結果からだけではこれ以上の解釈をすることは控えておきたい。

④教科の知識は、学校で学ぶべきものとして制度上でも規定されている。では教科の知識以外のものについて普通科高校の教師はどう考えているのか。

「学校の勉強と直接関係のない本でも幅広く読むこと」がとても大切と考える教師は70.0%と、「教科に関する学習」の場合とほぼ同じ割合となっている。普通科高校教師の大多数は、教科の知識に限定することなく、幅広く本を読みさまざまな領域の知識を生徒が獲得することを期待していることが分かる。

しかし、「時事問題について自分なりの意見をもつこと」がとても大切と考える教師は57.4%と10ポイント以上減少し、「政治に関心を持つこと」がとても大切と考える教師は40.0%とさらに少なくなっている。これらの結果から判断する限り、普通科高校教師が「学校の勉強と

直接関係のない本を幅広く読む」ことをとても大切と考えているとしても、政治的な領域や社会の実際の問題に関する本を読んだり知識を得たりすることに関してはそれほど重視していないのである。

一人の社会人としてこの社会の中で生きていくうえで、時事問題について自分なりの意見をもつことは非常に重要なことであるし、政治に対して関心を持つこともやはり非常に重要なことである。「民主主義国家の担い手として必要な資質や能力」を育成するという観点からもそれは極めて重要なことである。なるほど、教科である「公民」の中で「政治」や「経済」については学んでいる。それらの教科の授業において高校生は現代社会の政治経済の現実を学んでいる。しかし、教科書に記載された知識を学ぶだけではなく、現代日本や世界の日常生活の中で今起きている実際の政治経済の問題や他のさまざまな社会的な問題について現実を知り、そこで発生している問題について考えるということも非常に重要な学習である。どんな教科に関しても教科書の外に様々な知識を求めることは大切なことであるが、とりわけ政治経済に関しては、生徒が実際に生活を送っているこの現実の日本社会の中で毎日生起しているさまざまな問題について知り、考えることが非常に重要であり、かつ学習の効果という点でも極めて有効と考えられる。

ここまで「学校的な知」の集積である教科の学習を初めとしてさまざまな学習経験について見てきたが、それらと比較した時「政治に関心を持つこと」に対する普通科高校教師の評価の低さは明らかである。大多数の教師は「教科の学習」を重視している限りにおいて、その一部である「公民」の学習は重視しているのだとするならば、この数値の低さが意味しているのは次のことだろう。

「教科内容としての政治的な知識の学習」は重要であるが、現実の政治に関心を持つことはそれほど重要ではない、と教師が考えているということ。「教科の学習で得た成果が実際の生活の中で役に立っているのか」といった問題意識が教師には希薄であるということ。あるいは、高校生が現実の問題を自分なりに考え、現実の問題に対して自分なりの判断を下すことが「民主主義社会の一員」となるためには必要な訓練なのだ、という視点が普通科高校の教師には弱いということ。彼らにとって、「公民」などによる「政治的教養」の学習は、高校生が実際の社会で生きていくときに必要な<力>を身に付けさせるためのものというよりも、学期末試験や入学者選抜試験でより高い点数を取るという目的に照らして有益な力（＝学力）を身に付けさせるためのもののなのだ、と考えざるをえない。

（３）民主主義的資質の育成に関わる他の学習経験について普通科高校教師はどう捉えているか

「民主主義国家の担い手として必要な資質や能力」を育成するために、「現実の政治に関心をもつこと」以外にも重要な学習経験は種々ある。ここでは、それらの中から「人との関わりの経験」「自律的な思考力判断力の育成」「学校の秩序や統制からはみ出す行為」を取り上げて、それらの学習経験について普通科高校教師がどのように考え、評価しているのかを次に見ていこう。

（３）—１．友達や他の人々と関わることにについて

社会全体の都市化や生活水準の向上などにもよって日本社会は「他者との直接的な関わり」の必要性が減じられてきた。その結果、日本人は、大人も子どもも全体として人間関係が希薄になってきた。そのような社会の中で幼少年時代を過ごす子どもたちは、人間として成長する

上で不可欠の多様な人間関係の経験が時代とともに減少してきている。多様な人間関係の経験は、民主主義的な資質の一要素というよりも、民主主義的資質を育む土壌となるような人間の資質の最も基底的な部分を作るものとして重要であることは言うまでもない。

このような時代・社会の中で普通科高校の教師は高校生たちに「友達や他の人々との関わり経験」を与えようとの意識がどの程度あるのだろうか。

表2 他者との関わり大切さ

	とても大切	ある程度大切	あまり大切でない
A. 友達と協力して学校の行事に取り組むこと	79.9	16.8	3.4
B. さまざまな問題について友達と議論する機会があること	74.0	21.3	4.7
C. 生徒会活動やホームルーム活動に取り組むこと	62.0	35.3	2.7
D. 勉強の目的や意味について話し合う機会があること	55.0	34.2	10.8
E. 地域の人々と協力して地域社会の行事に取り組むこと	32.7	50.7	16.7

①「学校行事への取り組み」や「生徒会活動への取り組み」は学校が教育的な意図のもとに用意し制度の一部として組み込んだ「生徒同士の協同的集団的な学習経験」である。「友達との議論」や「勉強の意味などについての話し合い」は、制度には組み込まれていない学校生活のさまざまな場で生じる生徒同士の関わりの一形態である。そして「地域社会の行事への参加」は学校外の人々と生徒の関わりである。

「地域の人々と協力して地域社会の行事に取り組むこと」を除いたいずれの活動（学習経験）に関しても、過半数の教師が「とても大切」と答えている。とりわけ、「学校行事への取り組み」については79.9%と、大多数の教師が「とても大切」な学習経験と見なしている。

ここから判断する限り、「人と関わる」学習経験を普通科高校の教師は非常に重視していることが分かる。普通科高校の教師は、教科の学習を通じた一般教養的な知識の習得だけでなく、実際に友達や地域の人々と関わることを通じた人間関係の学習もまた大いに重要である、と考えているわけである。

上に述べたように、家族構成員の減少、地域社会の共同性の崩れなどのなかで、現代日本社会の子どもたちは否応なくかつての子どもたちが味わったさまざまな人間関係を体験することなく青少年期を過ごすようになった。このような状況の中で、普通科高校の教師が生徒たちに対して「人と関わる経験」を与えようとしていることは十分に注目されるべきだろう。

「学校行事への取り組み」を重視する教師の姿勢は今に始まったことではなく、むしろ近現代の日本の教育史上連続と続いてきた伝統ともいえるべきものだ。しかし、一方では「学校のスリム化」という標語のもとに「学校の任務を知育に限定せよ」との主張が強くなっている昨今、現場の普通科高校の教師自身が「座学」以外の「体験的」な学習経験をこのように重視しているという事実は改めて確認されておいてよい。

②以上の点を確認した上で、さらに「人と関わる経験」の具体的な内容を少し詳細に検討してみると、「友達と学校の行事に取り組むこと」がとても大切と考えている教師が86.3%と極めて多数であるのに対して、「勉強の意味を話し合う機会があること」がとても大切と考えてい

る教師は55.0%と、半数程度に減少し、さらに、「地域社会の行事に参加すること」がとても大切と考えている教師になると32.7%と、かなり少なくなっている。

普通科高校の教師は、子どもたちに「人と関わる経験」を与えたいと考えてはいるものの、そこで考えられている「関わるべき相手」として、学校の外部の地域社会に生活する人々はあまり想定されていないということである。また、そこで考えられている「経験」の内容とは、主として「学校の内部」で行われる「学校行事」のことであって、学校外の地域社会で行われる行事ではない。普通科高校の教師は確かに「高校生が人と関わる経験」を持つことを重視しているが、あくまでも、学校の内部で学校が与えた行事への参加という枠内に収まる限りで、人との関わりを重視しているというわけである。高校生の人との関わりが学校の枠を越えてその外部にまで拡大し、地域の人々と関わりまで広がっていくことに、普通科高校の教師はそれほど大きな価値を置いていないということになる。

(3) — 2. 自律的な思考力判断力

民主主義的な社会を標榜している日本の教育においては、先に検討した「政治的教養」を身につけるための教科（例えば公民）の学習も重要であるが、それだけでなく、更に、様々な日常生活の場面での「行動様式」「態度」が民主主義的なものとなることも極めて重要な課題である。

「民主主義的な態度」の構成要素としてはさまざまなものがあるが、ここでは、とりわけ重要と考えられる「自律的な思考力判断力」を取り上げる。

表3 自律的思考の大切さ

	とても大切	ある程度大切	あまり大切でない
A. 人の意見に振り回されずに自分の頭で考えられること	84.7	15.3	0.0
B. 誰に対しても自分の意見を言えること	61.3	34.7	4.0
C. 学校が決めた規則は納得できない部分があっても守ること	31.3	48.7	20.0
D. 教師の指示に素直に従うこと	22.0	50.0	28.0
E. 周囲の人々の意見に合わせ、自己主張を抑えること	4.7	51.3	44.0

思考判断の自律性を普通科高校の教師がどう捉えているかを知るために、調査では「人の意見に振り回されずに自分の頭で考えられる」ことや「誰に対しても自分の意見が言える」ことについて尋ねている。前者は端的に「自分の頭で考えること＝思考の自律性」を示す項目であり、後者は考えた自分の意見を他者に向かって堂々と表明する態度を示す項目である。後者は「思考の自律性」そのものではないが、思考の自律性が実際の人間関係の中で実効性を持つためには重要な態度であると思われる。

表3にあるように、前者については84.7%の普通科高校の教師が、また後者については61.3%の教師が「とても大切」と考えている。これらの数値をみる限り、普通科高校の教師は、自律的な思考力判断力を形成することは高校生にとって大切な学習経験であると考えている、と言える。

同様のことを言わば反対側から尋ねたのが「学校が決めた校則は納得できない部分があつて

も守る」「教師の指示に素直に従う」「周囲の人々の意見に合わせ、自己主張を抑える」などの項目である。

これらの態度のいずれに対しても、「とても大切」と考えている普通科高校の教師は少ない。学校が決めた校則にせよ、教師の指示にせよ、「それらのものに生徒は自らの判断を控えて無批判的に従うべきである」と考えている教師は非常に少ないというわけである。とくに「周囲の人々の意見に合わせ、自己主張を抑える」態度については「とても大切」が4.7%と非常に少ないのに対して、逆に「それほど大切でない」が44.0%となっている。

「出る杭は打たれる」「足並みを揃える」「和を乱さない」など、「集団の画一性から突出する態度・行動」を否定的に評価してきたのが日本社会の伝統的な社会心理であった。ここまでの分析が明らかにしているのは、そのような伝統的な社会心理に対して、普通科高校の教師は必ずしも同調的ではない、ということだ。

では、以上の結果から「普通科高校の教師は高校生に自律的な思考判断を育成することを重視している」と結論づけていいのかというと、残念ながら、必ずしもそう結論付けることはできない。というのは、以下のような調査結果も得られているからだ。

(3) — 3. 学校の秩序や統制からはみ出す行為に対する教師の見方

学校が設定した規則を守り、学校の秩序を傷つけず、学校から課された勉強や行事などの課題遂行に専心して真面目に学校生活を送ることは、高校生がこの社会の中で一人の大人として成長していくうえで極めて大切なことである。

しかし、民主主義的な資質の一つとして、「既存の社会に適応する資質や力」だけではなく「既存の社会を改革していく資質や力」を数えるのであれば、「既存の秩序から距離を置いたり統制からはみ出したる行為」もまた、民主主義的な資質の育成にとって重要なものといってよい。「自律的な思考力判断力」の育成という観点から考えても、「真面目」「秩序」「規律」といった価値は、遵守されるべき価値であると同時に、そこから時にははみ出されるべき価値でもある。普通科高校の教師は自律性育成に不可欠な自由＝非拘束的環境を高校生に与えることについてどう考えているのだろうか。

表 4 非拘束的環境の大切さ

	とても大切	ある程度大切	あまり大切でない
A. 規則がゆるやかで生徒の自主性に任されていること	28.7	42.7	28.7
B. 生活の中でなるべく多くの自由な時間を与えられること	22.6	42.0	35.4
C. 他校の生徒と学校外で交流すること	16.2	40.3	43.6
D. 服装や髪型に関心をもつこと	6.7	25.5	67.8

①学校の予習復習や宿題などの勉強からも、あるいは親その他の大人が指示した何らかの課題からも解放された「自由な時間」というものに対して、「それほど大切でない」と考える教師が35.4%もいる。逆に「とても大切」と考える教師は22.6%しかいない。「ある程度大切」と考える教師も42.0%となっているので、普通科高校の教師が高校生に自由な時間を与えることをあながち軽視しているというわけではないが、ここまで見てきた他の学習経験に対する高い

評価と比較したとき、「自由な時間を与えること」に対する評価の低さはやはり注目に値する。

また、「規則が緩やかで生徒の自主性に任されている」ことに関しては「とても大切」と考える教師も同じく少なく、わずかに28.7%である。授業中や放課における行動の仕方、あるいは服装・髪型・所持品などに関して高校にはさまざまな規制が「校則」として存在しているが、それらの規則をなるべく少なくし規制を緩やかにすることに対して、普通科高校の教師はそれほど重要なことだとは判断していないと言ってよい。

先に「思考の自律性」を育成することを普通科高校の教師が重視しているという分析結果を示した。自律した思考力判断力を育み鍛えるには、高校生たちに自らの頭を使って思考し判断するだけの時間的な余裕を与える必要がある。その生活時間が教師や親によって指定された活動だけで埋め尽くされては、「思考の自律性」は育たないからである。同様に、学校が定める規則は緩やかにして、学校生活におけるさまざまな場面での行動の判断に関しては生徒の自由な裁量の余地をなるべく残しておくことも、生徒の思考の自律性を高めるために必要なことだと思われる。

そう考えると、「生活の中でなるべく多くの自由な時間と与えられる」「規則が緩やかで生徒の自主性に任されている」ということに対する評価の低さは、先の「思考の自律性の重視」という分析結果とは逆に、普通科高校の教師が生徒の思考判断の自律性を必ずしも重視していないことを示している。

一見矛盾するこの結果は、次のように考えることによって整合的に解釈することができるのではないか。

普通科高校の教師にとって「自分の頭で考える」とは教師や親など「上位の者」からの「指示」がなくても、自らの意思で行為を選択することである。「言われたからやる」のではなく「言われなくてもやる」のが「自律的」「自主的」の意味するところである。そのような「自律性」「自主性」にとっては、「自由な時間」や「緩やかな規則」は必ずしも必要ではない。だからこそ、アンケートに対して「自由な時間」「緩やかな規則」といった既存の秩序から距離を置くことに通じる事項を軽視していながら、同時に「自分の頭で考える」ことを「大切」と答えることができるのだ。

ここには「思考判断の自律性」が含意している「既存の秩序への批判的眼差し」という視点が欠けていると言わざるをえない。

②学校秩序の枠からはみ出した具体的な行動の例として「他校の生徒と学校外で交流する」「服装や髪型に関心を持つ」について尋ねた。大多数の高校生は実際に「他校の生徒と学校外で交流」しているし、「服装や髪型に関心を寄せている」。だが、その生徒を教えている高校の教師たちは、そもそもこれらの事柄について望ましいことだと考えているのか、それともできることなら無い方がいいが実際上の問題としてなくすわけにはいかないと考えているのだろうか。

表4を見れば明らかのように、「他校の生徒と学校外で交流する」ことについては43.6%の教師が、そして「服装や髪型に関心を持つ」ことについては67.8%の教師が「それほど大切でない」と答えている。逆に「とても大切」との回答は前者については16.2%、後者については6.7%と、極めて少ない。

高校生が一人の人間として成長していくためには、なるべく多様な人間と関わるのが大切である。自分が在籍している学校内の人間関係だけにとどまらず他校の生徒と関わる。あるいは小学生や中学生、さらには大学生と関わる。そしてさらに学校の外部で多様な社会

的存在として生活している人々と関わること。いずれもが高校生が大人になっていくために不可欠の学習経験と考えられる。

また、高校生の年代で服装や髪型に関心を持つことは人間の成長過程の一段階として極めて自然なことである。服装や髪型に関心が向かなかったとしたら、それはむしろ大人への正常な成長が妨げられているとさえ考えてもいいのではないか。そうだとすれば、普通科高校生が「服装や髪型に関心を持つこと」は、「一人の人間としての成長」という視点からは本来「極めて大切」なことだ。

他校の生徒との学校外での交流が、現実の問題として「喧嘩」や「もめごと」あるいは「集団的非行」を生じさせる恐れがあることは確かである。だから教師がその不安を感じているであろうことは了解できる。また、「服装や髪型への関心」は、高校が生徒に期待する最大のものである「勉学」との関わりからみれば、それは勉学行為から最も遠いところにある行為である。また服装髪型への関心が強まることは、相対的に勉学への関心を弱め、実際に勉学行動を妨げることは十分予測される。したがって、＜希望＞や＜理想＞としてはともかく、＜現実＞の問題としては、これらのことを生徒に勧められないことは理解できる。

しかし、調査ではそのような活動経験が「大切かどうか」を尋ねている。それらのことが実行された時に現実に付随する諸問題は別として、「高校生が一人の人間として成長していくための学習経験として大切かどうか」という質問をしている。回答者もその視点から回答しているはずである。したがって「現実の問題としてはそれらのことは重視できない」と判断したとしても、「本来のあり方からすれば大切である」と教師が考えているならば「大切」との回答率がある程度高くなると考えられる。この推測が正しいとすれば、調査結果に示された数値は普通科高校の教師が「他校の生徒との交流はそもそも大切なものではない」「服装髪型への関心はそもそも大切なことではない」と考えているということを示している。

以上をまとめると、結局、普通科高校の教師は「生徒が自分たちの統制圏内から離脱すること」および「勉強を中心とした、学校が承認した活動以外の活動への興味関心を育てること」に価値を置いてはいない、ということになる。

3. 最後に

本稿では、高校生が社会に出てから一人の人間として生きていくうえで必要なさまざまな学習経験について普通科高校の教師がどのように考えているかを検討してきた。彼らは「教科の学習」だけが大切であると考えているわけではなく、他のさまざまな学習経験を重視していることが明らかになった。

しかし調査結果をきめ細かく吟味すると、次のような解決すべき問題があることも分かった。すなわち、①「生産や労働や生活に関わる学習経験が軽視されている。②現実の政治への関心が軽視されている。③地域住民や他校の生徒など学校の外部の人々との関わりが軽視されている。④既存の秩序から距離を置きそれを相対化する振る舞いが軽視されている。

高校卒業後一人の社会人として生きていくために必要な力を育むための学習経験が普通科高校の中で今後さらに深化発展するためには、こうした問題点の克服が課題であると思われる。

これらはもちろん直接的には教師自身の学習観や教育観あるいは人間観や社会観の問題であるが、同時に、教師をとり囲む社会全体の学習観や教育観あるいは人間観や社会観の問題でもある。私たちがそれほど自覚することもなく「常識」として身につけてきた学習観や教育観あ

るいは人間観や社会観の省察と見直しを抜きにしてこの問題の解決は期待できない、と筆者には思える。